

ヨシイちゃんのひとりごと



運・鈍・根

第六話

人間を80年やっていて、新しい業種に食われ始めていたからです。偶々の成功例ですが、情報を読み違えて手痛い失敗も山ほどあります。東日本大震災の「これより下に家を建てるな」の碑で犠牲者が出なかつた」のテレビ放映で、「碑の役割」を改めて知り、偶々「家」修道学区内に転居準備中で、ふと、「馬町空襲」に「碑」がないことを思い出しました。

東日本大震災のように人間ではどうすることも来ず「運命や」で納得するしか無いようなことも起こりますが、そんな天災の場面でも、チョツとの違いで助かった人とそうでない人があると大震災で知りました。「運命や」で終わらせず「何が起こつて、その場合は？」を知っていた人のほうが「知らず」にいた人より多く助かっています。平たく言えば地震の場合情報力の「差」が生死を分ける事もあ

るのです。生死ほどのことでも無い、小さなことでも、「情報」は大切です。私の場合でも「石油ショックが起こる(だろ?)」との情報を半年前に「ぼんやり」と知っていたことです。お陰で借金だらけの開店を手に入れ、早々の店を早く起動に乗せられました。又、後に

酒屋をコンビニ業に転換したのもアメリカで「スーパー」全盛時代にその地盤をじわじわと「コンビニエンスストア」という新しい業種に食われ始めていたと聞き、興味深く見ていたからです。偶々の成功例ですが、情報を読み違えて手痛い失敗も山ほどあります。東日本大震災の「これより下に家を建てるな」の碑で犠牲者が出なかつた」のテレビ放映で、「碑の役割」を改めて知り、偶々「家」修道学区内に転居準備中で、ふと、「馬町空襲」に「碑」がないことを思い出しました。

あゝ、阿武隈川

石動敬子

もうりの名人だったし、その片腕として頼りにされるのは長女だった。だが、鶏をしめたり、あとのもろもろ、台所の年用意は、やはり、祖母と母のもので、拭き掃除のほかは、せいぜい播鉢の縁を持つ位だった。家族総出の餅つきの際も、いも懐かしいが、特に蒸し終えたもち米を小さく握つたものを、はふはふいたたくのは最高だった。ササニシキ、こしひかり、ひとめぼれなど、お米自慢の土地柄だったし、言われて、山の田に芹や蓬を摘みに行くこともあつた一級河川、阿武隈川が、悠然と流れ、食べることに事欠かない土地だった。

阿武隈川河口付近



荷するといつた手伝いもした。素人ながら、母は、花や野菜作

それがかなり異なり、戸惑つた。それだけでなく、実家への新年おめでとうの初電話口で思わず、泣いてしまった。大好きなお餅の餡子、クルミ、胡麻、黄粉、ずんだ、納豆などは当然ながらこちらには無く、おろし餅と煮しめがメインだった。雑煮のおすまし味はさすがだったが、若かつたあの頃は、つまるところ雑煮の具沢山とさまざまな味の角餅こそが最高の正月のごち

「よいお年を」などと言いつつ別れ、結構その気にならな年末だが、その実どうだろ。最悪の秘密保護法が通過し、消費税値上げの春が、すくそだ。故郷の阿武隈川も気配無き放射能の汚染に細るばかりなのだ。

そういえば、ようやく仕事納めにこぎつけた年末、ヘルペスにかかり七転八倒したことがあつた。入院するほどでなく、日にち薬と言いつつも、三が日を凌いだだが、余りの痛さに何も手につかず、仕方なくテレビのお笑い番組のはしごなどをしていた。それが良かったか。不思議なほど、回復が早く、後遺症もなかつた。正月は、笑いに笑うに過ぎるようだ。後は、ひたすら年賀状。今は、パソコン教室ひよこ組に在籍中だから、手書きとのコラボが、さあ、どうなりますやら。

「類」押し当て

「類」押し当て

「類」押し当て

「類」押し当て

主催：馬町空襲を語り継ぐ会

みちのくの冬林檎



京都&東山 ぶらりピカリ

45

太閤(秀吉)と瓢箪



上の「紋章」は私共の店の(校区)貞教小学校の校章で「千成瓢箪」を使っている。小学校は無くなったが、今も懐かしみ地域で使われている。その学校は創立時「耳塚」の傍にあった。



明治になって豊臣秀吉公が復権し、伏見城(国宝)の門を移築して「豊国神社」(祭神は秀吉公)があり、その地は秀吉公が造った「京大仏殿」跡地である。



大仏殿の正面、本町通りに面してその頃から「大仏餅」を売ると店(写真)があった。昭和30年代に壊されたが、今なら絶対に保存された建物だ。そして「本町通り」も秀吉の桃山城と「京」を結ぶために造られた道でもある。更に神社隣地には方広寺があって、徳川家によって豊臣家を潰す口実になったという「国家安康」の釣鐘も有り、「秀吉公」との縁の深い地域である。



その秀吉の「馬印」が千成瓢箪」であることから、地域活性化の取り組みに「瓢箪ひょうたん」を植え育てる活動が東山区で本年度から始まり、私も参加した。「協力くださった方に「種を配り」植えて貰う。又、畑を提供下さった場所でも育て「実」ができて、料理店の協力を得て「二人程集まり「試食会」が催された。料理屋さんだから「煮物、酢のもの」などの形でだされた。「味の食感」も「瓜」に似ていた。「瓜」とはヤヤ味が「薄い」と思いながら食べた。その中に「苦味のキツイ」ものもあったが無理してたべた。旨い酒もあつて「機嫌で帰宅し寝た。」

一時間後「腹痛」で「トイレ」に行く。強烈な下痢で何度か「トイレ」通い。翌朝には治まったが「瓢箪」が原因としか思い当たらなかつた。幹事さんに電話をと思つていた所へ「酒谷さん大丈夫か?」との方が来られた。前日同じテーブルで食べた人も下痢をしたと知る。苦かつたものは「食用でなかつた」とわかる。「良薬は口に苦し」というが、それは「人の意見と薬」にだけ当てはまらず、「苦いものは食べたらず」。

数日後、「瓢箪で下痢した」は「瓢箪」のニュースがTV流れた。後の祭りだ。「口は優秀なセンサー」も教えられた。

市電が走つ 京都を巡る

35 た

福田静一



農学部 前を出発した市電

は、今出川通を東へ向かいます。面側に広がっていた京都大学のキャンパスは車窓から消え、再び小さな商店が続く学生街が続くようになりまし。

家々の間から吉田山が間近に見えるようになると、右手に赤い鳥居が見えて、それをくぐる遊歩道が山頂の吉田神社へと続いていきます。右手から斜めに道が近づいて来て、今出川通と鋭角に交差し、す。やがて到着するのが「北白川」です。

斜めに交わる道は古来からの道で、白川の集落を経由して近江へ向かう「志賀越え」です。現在の道路呼称では「志賀越道」と表示



大きなお地藏さまの横を歩く市電

されています。別名「山中越え」とも呼ばれています。

もともと志賀越えは、京の七口のひとつ、荒神口から発していました。鴨川に架かる荒神橋の北から、東北の方向にほぼ一直線が続いていた道でしたが、江戸時代になると、志賀越えを横断する形で尾張藩屋敷ができて、明治期、回廊敷跡に開学した京都大学も、そのまま敷地を継承したため、地図上からはこの部分だけ道が消えています。京都大学の新校舎建設時に発掘調査を行うとその経緯を裏付ける形で遺跡が出土したと言います。

志賀越えが再び姿を現すのがこの北白川付近です。古くから京都と湖西方面を結ぶ近道として旅人に利用され、また米などの物資も牛馬によって運ばれました。今出川通から少し入ると、街道を思わせる古い民家も見受けられます。また花の栽培・行商も盛んで、その行商する女性は、白川女と呼ばれています。

北白川電停の北西角、志賀越えとの分岐点に、今でも高さ二メートルもある大きな石の地藏さんが、どっしりと座っています。表面は磨耗して表情は読み取れませんが、地元では「子安観世音」と呼ばれ、信仰されています。

また別名を「太閤の石仏」とも呼ばれています。太閤秀吉がこの地を通りかかった時、この大きな

雪の大文字山を見て

北白川電停に到着



な石仏に感心し聚楽第に運ばせました。すると夜になると不気味なうめき声を上げます。さすがの太閤さんも、仏の力には勝てず、もとの北白川の地に戻すことになったと伝えられています。白川の花どころらしく、地藏さんにはいつも美しい花が供えられているのが印象的です。

今はビルに遮られて見えませんが、ここからは大文字山が真正面にも迫ってきます。大文字の送り火の時は、さぞ市電との取り合わせが良がること、八月十六日の晩カメラ一式を抱えて、北白川電停で待ち構えたことがありました。ところが、送り火が点火してもなかなか市電が現れず、やっと来たと思つたら、自動車のライトに邪魔されて見事に失敗。写真の難しさを思い知らされた北白川電停でした。

福田静一さんは、市電の本を幾冊か著された方。当社にもあります。ご覧下さい。



酒屋で生きて 生かされて



第八十六話

酒問屋酒谷本店危機

昭和28年は風水害の多い年で7月18日紀州大水害：8月15日は集中豪雨に起因する南山城大水害：9月25日、志摩半島に台風13号上陸と大被害が続きました。

その頃の19歳の私は「商売」とは別の「道」を歩んでいました。その指示で8月は紀州大水害地（「猫頭長」で有名な）「貴志川町」に松下電器京都工場労働組の人達と救援隊（ボランティア）で救援に参加していました。が、その活動最



中に、南山城水害があり、急遽、被害の大きかった井手町に移り掘立小屋に住みついて救援活動をしていました。

前号に書いた状況で父に呼び戻され酒問屋を整理をして「酒小売」をする方がと意見を言ったのです。が父は「酒問屋」を続けたいといっています。当時の酒問屋は「免許制度」で「問屋」は「酒小売屋」にしか販売を出来ないのですが、まだ酒類は「公定価格」の状態です。「良い商売」だったからです。帳簿では、銀行借入を処理できれ

ば続けられる状態でも有りませんでした。「債権者（仕入先）」にお願いでして支援を求められない」と意見を告げ、父もその方向で話を進めました。結果、土地家屋を担保に朝日麦酒や協和発酵等々の出資を受け、その金で銀行借入金返済して「株式会社酒谷本店」が出来ました。只、私とその会社に社員として「商売」手伝つを条件付で、仕方なしに心しました。

その間、昭和29年3月15日から十ヶ月弱の日々は、商品も何も無い。弟や妹は、祖母の住む家に移り住み訪れる人も無いガラリとした悲惨な状態の十ヶ月で人の世の非情と暖かさを知ることが出来ました。

会社は債権者から専務役が派遣、監査役も債権者で厳しく管理された形。社員は4名で配達はオート三輪自動車1台でスタートです。京都滋賀県で当時「酒卸免許」は40店の中でも最小、私は平社員、給料も他の人より安く希望して、厚司（細無地の仕事着）を着て酒屋前掛け姿で「配達とセールス」として働きました。



体制の弱い会社ですから、地元東山区を最重要に頑張ろうと決めた一度は「セールス」に必ず訪れることにしました。でも、一度つづれ掛けた店、その上、私共のため「迷惑をお掛けした経緯もあつて中々成績は上がりませんでした。危機に見舞われます。

初春の「挨拶 申し上げます

月二天

明けましておめでとございませう。昨年はありがとございませう。さて、振り返るのは年越し前までとして、今年は何んな目標を立てましようか？私はいいます。ものを書くことつくることが多いため、「丁寧」といふ言葉をあらためて感じていきたいと思っています。ペースはゆっくりでいいのです。ちょっとしたことでもいいのです。出来る範囲でいいのです。皆さまも無理のない一言を選んでみて下さいね。後のことは、まあ、長い未来に笑えるように今は何とかケセラセラです。

ベタな目標の話はここまでにして、干支の話をしてしましよう。午を馬に変換いたしますね。馬と干支の平面をパッカパッカと駆けていきます。しかしこの世には、それはそれは美しい「天馬」といふ響きがござい



ますね。西洋では「ペガサス」と呼ばれています。地上をパッカパッカと駆けるのもいいですが、それでは昨年と同じ終わり方をしてしまいます。何事も少しづつ上昇してゆくもの。天馬のようにとは申しませんが、地上から一段ずつ空を登っていき、来年のこの時期にはモクモク雲の羊の上に辿り

着くといいたすね。そこから先は、ちょっと休んでからまた考えましよう。では、午とは何か？刻限として十一時～十三時を指すことは、ご存知の方が多くていしょう。方角は南、季節は仲夏。しかし、意外な事に原語は餅つききの「杵」なのです。それがなぜ「馬」に当てられたかは色々説が有りまして、庶民に思想を浸透させやすくなるため、とか馴染みやすい動物を当てたからとか。

編集後記

この元旦号は、「馬町空襲の碑」の除幕式の準備と身内の「取り込み」が重なって作成が大幅に遅れました。

毎号似たような「言い訳」をして恥ずかしい限りです。お許しください。ご投稿以外は、文も編集印刷も自分で。仕上げに大苦戦です。

まあ、誰に頼まれたものでもないし、読まれる方も少ないだろうし、自己満足でもエエやんかと思いついてます。

だといって止めやとも書えませんが、月一回でも、書くには、記事になる色々な物事注意をします。面白い発見もあるから……。

少なくとも少し「ボケ防止」になるやろうと家内に言うところも効果はアラヘン。直ぐ忘れるヤンカと言つ。祖母は祖父を「天皇様扱い」でしたが、今は大違い。奥方の力は逞しくなりました。すっかり「女男同権」です。

1.16 馬町空襲碑出来て 「除幕式」シマッセー。

あの日から69年。国民学校5年生11歳。その夜のB29の爆音と爆弾のドドドドンの音。見ているテレビの音は聞こえにくいけど、その音は耳の底に残って